

洲本市街地の夜空を彩る淡路島まつりの花火
＝大浜海岸



大浜海岸で花火大会 4千発打ち上げ

○：最終日の4日、洲本市海岸通1の大浜海岸で花火大会があり、約4千発の光の花が空と海に輝いた。この日、市の臨時駐車場7カ所は全て満車に。会場は約2万人（主催者発表）の観覧者でにぎわった。午後8時、軽快なポップス曲に乗って打ち上げがスタート。夏の夜空と海が金色や青、緑色に染まった。大阪市から両親らと一緒に訪れた宮崎咲菜さん（8）は「ハートの形やカラフルな花火がきれいだった。また来たい」と笑顔だった。（荻野俊太郎）

夏の大輪 夜空と海を染め

5年ぶり通常開催 町に活気

おどり大会 3千人躍動

○：2日夕、まつりは蒼開高校ジャズバンド部の演奏で華々しく幕を開けた。2、3日はおどり大会があり、2日間で延べ約3千人、58団体が参加。市街地の路上やステージで阿波おどりとダンスを繰り広げた。

同市本町1の木下秀美さん（77）は沿道で踊り手に拍手を送り「コロナ禍で暗かった町が明るくなった。エネルギーをもらった」。太鼓の音や踊り手のかけ声が響く中、同市上内膳の久米美鈴さん（89）は「5年前の活気が町に戻った。胸がいつぱい」と涙ぐんだ。

阿波おどりを披露した「郷土民芸三熊踊り保存会三熊連」の西田凱登さん（26）は「見に来てくれた人の声が近くてうれしかった。洲本の夏が来たなど久々に感じた」と満足そう。同連の玉井ゆかり連長は「コロナ禍前と比べて出場団体が減ったことが残念。今回を機に以前の数に戻ってほしい」と期待を込めた。（荻野俊太郎）



5年ぶりに開催された「おどり大会」洲本市本町5（撮影・内田世紀）

洲本で淡路島まつり
淡路島の夏の風物詩「第17回淡路島まつり」が2日から3日間にわたり、洲本市街地で開か

れた。新型コロナウイルス禍での中止や縮小を経て、5年ぶりに市街地での阿波おどりの練り踊りや大浜海岸での花火大会が復活し、町は猛暑を吹き飛ばす活気にあふれた。



NEXTに
動画

阿波おどりの魅力を実感

本紙記者が初体験

「実際に踊ってみると、魅力は分かんない」阿波おどりに関係者の言葉に背中を押された。経験は全くなかった。「一緒に踊りたい」。そんなわがままを、洲本市を中心に活動する「舞女流華連」が

受け入れてくれた。

7月中旬から練習に参加した。阿波おどり歴20年以上のベテラン多田裕さん（60）に指導を受ける。腰を落として胸を張り、手を頭より上へ。すぐ腕も腰も曲がり、不格好になった。

「肩の力を抜いて」と多田さん。しかし本番を思うと、余計に力が入った。

「舞女流華連」の受け入れで参加



真剣な表情で阿波おどりを踊る荻野俊太郎記者（中央）＝洲本市本町6（撮影・古田真央子）

3日午後5時、30人全員が着替えのため集合した。「まじよるか」の文字が入った白い着物に身を包み、

黒い帯を巻く。頭には黄色の鉢巻き。初めて履く地下足袋。気が引き締まった。午後6時、さあ出発だ。

途中、肩の痛みで心が折れそうになった。沿道から「頑張れ」と声援が聞こえた。拍手も。

午後9時半。「総踊り」が始まった。疲れは吹っ飛ばす。演舞場の端まで踊りきり、振り返ると、踊り手と観客の笑顔が輝いていた。同連の富本芳榮連長は言った。「手を上げて、足を運べば阿波おどり」。その動作をいかに美しく見せるかという奥深さと、熱気、そして観客との一体感。人々がのめり込み、受け継ぐ理由が分かった気がした。（荻野俊太郎）

未経験者も踊って笑顔



浴衣や洋服などそれぞれの格好で踊る「にわか連」の参加者＝洲本市本町5

「にわか連」に160人

○：未経験者らが参加できる「にわか連」も祭りを盛り上げた。初日は島内外の約160人が、浴衣姿などで路上へ繰り出した。洲本商工会議所女性会が広く参加者を募った。当日の飛び入りも可能。希望者には浴衣の貸し出しや着付けのサービスもあった。

観光客、島内のホテルの従業員、地元住民……。午後8時半、さまざまな人々が厳島神社に集まった。同市本町の主婦藤阪すずかさん（76）は「楽しそうで、ずっと踊ってみたかった」と友人と参加した。祭り好きだという県立あわじ特別支援学校2年畑山裕斗さん（17）は「元気に踊りたい」と笑顔。洲本市の山口久仁子さん（54）は「久々のお祭

や、腰を落として腕を振るなどの動きを練習し、本番へ。沿道の熱気を力に約120分を練り踊った。（古田真央子）